

「ぼうびをありがとう」

10月14日・15日、岐阜市で開催された全国大会に、市内から一人の女性が出場したのを知っていますか。彼女の名前は、佐伯鮎海さん。陸上50メートル走と100メートル走の、愛知県代表選手です。

彼女が出場したのは、ぎふ清流大会の愛称で知られる第12回全国障害者スポーツ大会。

そんな彼女の歩みを紹介します。



個性と 付き合う

佐伯鮎海さん(18歳)
安城養護学校高等部3年
4歳の時に、発達障害の一つである「自閉症」の診断を受ける。
本年、愛知県障害者スポーツ大会を経て、第12回全国障害者スポーツ大会に出場を果たす。

見た目は一人のアスリート。しかし、彼女にはこれまで付き合ってきた「ある個性」があります。

◆彼女の得意分野は「文字」

「2歳の時、駅の看板に書いてあるひらがなが読めましたね。高校1年で漢字検定の準2級に受かっているから、文字は好きなのかも。」と話すのは、母親の千恵子さん。

「元々、同じ年の子と遊ぼうとしない、目線を合わせないこととはありました。成長すると、今度はバイクの音や赤ちゃんの泣き声など、特定の音に過敏になることもあって。」

4歳のある日、発育を相談していた臨床心理士の紹介で病院へ。医師の診断は「自閉症」。聞きなれない言葉でした。

◆どんな病気？

「何かあると思っていたので、『ショックで泣く』なんてことは無かったです。どうなってもこの子に変わりはない。ただ、『どんな病気？』っていう思いでしたね。」

◆みんなと一緒にいたい

保育園に入った頃も、みんなと一緒に遊ぶことや、決められ

たことをするのは苦手。でも一緒にいることは好きだったそうです。

「小学校入学に先立ち、特別支援学級(※)を勧められました。ただ、娘は『みんなと同じクラスがいい』と。悩みましたが、この一言が決め手で普通学級にしました。」

※特別支援学級 障害の種類ごとの少人数学級で、障害のある子ども一人一人に応じた教育をするクラス。

◆爆発しそう

「入学した次の日、担任の先生から『教室を出て行ってしまいました』と電話が。それから毎日、席についている日は数えるほどしかなかったですね。」

当時のことを、鮎海さんはこう話します。

「爆発しそうだった。教室だと、ほかの子にやつ当たりしそうで、何回も飛び出しました。職員室で先生と話すが楽しかった。」

爆発しそうな理由をたずねると、ただうつむきだけでした。

◆周りの子に助けられた

(鮎海)「小学2年生の時は厳しい先生。ほかの子に噛み付いたり、違う教室に行ったりすると

●発達障害 発達障害者支援法にて「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」と定義されている。生まれつきの脳の障害であり、しつけや教育環境によるものではないと言われている。

すごく叱られた。怖かったけど、甘えてもいた。それで、教室で寝転ぶことはあったけど、出て行くのは我慢できるようになった。」

(千恵子)「このままでいいのかわからないか」と悩みました。ただ、鮎海が学校に行きたくないと言つ日は無かった。変な子だと馬鹿にする子もいたみたいですが、助けてくれる子の方が多かったです。登下校だけ付き添いましたが、学校での様子を伝えてくれる子、難しい漢字が読めてた」とほめてくれた子もいました。周囲の子を見ていて、娘の居場所はどこで良いんだと安心できました。」



特集1

ごほうびをありがとう 聞いてよ ウチの子ったら



小林厚子さん 長澤礼さん 佐伯千恵子さん

発達障害の子どもを持つお母さんたちのお話をのぞき見。子育ては大変。だけどやっぱり子どもはかわいい。そばに寄り添って感じたこと、聞かせてください。

佐伯・娘の発達障害が分かったのは4歳の時。何となく発達の遅れに気付いていましたが、できるところもあり、様子を見てから診断を受けました。長澤・うちは言葉の遅れがありました。息子が1歳半の時に、かかっていた皮膚科の先生が、小児科も担当と知り、相談を切り出したところ、広汎性発達障害だと言われました。

小林・小学5年生の頃、勉強についていけなくなつて。私がお家でみっちり教えても、全く成果が出ず。そこで懇意にしている病院で診てもらったところ、学習障害とアスペルガー症候群の診断でした。

◆音に敏感
佐伯・特定の音が苦手でした。赤ちゃんの泣き声が聞こえて、叩きに行こうとしたのにはびつくりしました。小林・うちは掃除機の音。よくおんぶしてあやしなから、掃除機をかけてましたよ。

長澤・運動会のスタートの鉄砲音に、最初は腰を抜かしてました。花火を見に行つた時も驚いて走りだしちゃって。カメラを渡して撮らせてあげたら、楽しんで見ることができましたよ。



鮎海さんのお母さん。笑い話は絶えないとか

◆目に見えない分、悩ましい
小林・中学校進学時に特別支援学級へ移りました。会話は問題なくできるし、生活にも支障がないので、「何で普通学級じゃないの?」と、周りの人からよく聞かれました。障害が目に見えないので、理解されにくいですね。

長澤・友達と一緒に遊んで、例えば相手を怒らせてしまつても、同じ調子で遊んでしまつて。怒鳴られて初めて気付くんです。「相手の立場に立つ」ということが、難しいんですよ。周りの人に教えてもらえたら、気付いて謝ることができるんですが。

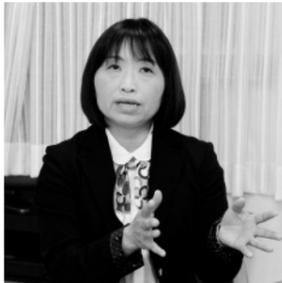
◆「自分のタイミング」がある
長澤・入学前に算数とひらがなを教えようとしたんですが、全然ダメ。それが入学して、学校の先生が教えたら、途端にできるようになって。「時間割が決まっついで、時間がきたらチャイムが鳴る」というパターンが、しつくりきたみたい。焦らず子どもたちのタイミングに合わせてあげたい。だって思いました。

小林・特別支援学級へ移ることで、ずいぶん悩みました。世間で、身内の反対、会話や生活に支障のないこと。「このまま普通学級で通してしまおうか。でも明らかに学習に差が出ている。」と。決めては、主治医の「この子らしさを無くしてはいけな」という一言。自分の子の人格まで壊すところだったことに気付き、決断できました。

◆子どもの居場所はどこか
佐伯・周囲の子と全く同じにできるとは思っていませんが、娘の思いを受けて、小学校では普通学級にしました。おかげで、身になったことや良かった経験がたくさんあります。もちろん、特別支援学級にも良さはありますが、当時

の娘にとつては、良い居場所だったんでしょね。

小林・中学校の特別支援学級から、高等養護学校へ進学したら、似たような子がたくさんいました。そこで、「友達を作つて、おしゃべりをして、遊びに出かける」という夢が叶ったとき、息子は本当にうれしそうでした。



親子共に、一生の友達ができるのが夢だった

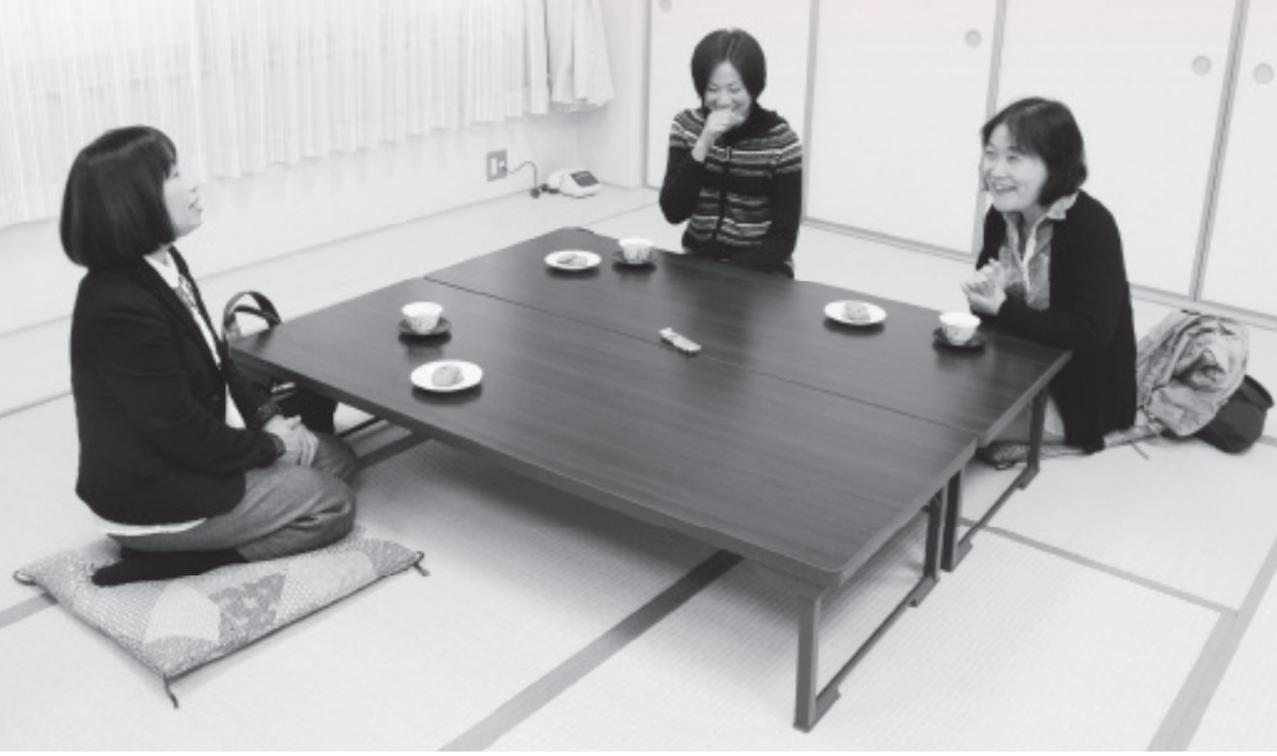
◆「引きこもり」とは違う
佐伯・娘は人と話すのが好きで、「本当に自閉症?」とよく聞われました。「閉じこもり」とか「引きこもり」と同じ意味で使われているのを聞くと、勘違いされていると思いますね。

小林・アスペルガーは、凶悪犯罪の報道などから、マイナスのイメージを持たれてしまいがち。対処ができていない一部の人であつて、自信の持てる環境で育てば、本来はルールをしっかりと守るという特徴があるのに。

長澤・治るものじゃなくて、うまく付き合つていくものですよ。その子の個性や特徴を理解して接してあげれば、できることが増えますね。



「息子が大好きです」と話してくれました



特集1

ごほうびをありがとう 支援の 立場から

全員への配慮につながります

教育センター相談員
山岡美和氏(臨床心理士)

◆発達「のちへはぐ」

私は、「その子にとって、どんな学習の場が望ましいか」といった、就学相談を受け持っています。発達障害をはじめいろいろな悩みを持つ子や、その家族、学校の先生などのサポートができればと思っています。発達障害を、私は「発達のちぐはぐ」と表現します。ある面はよくできても、ある面はなかなかできない。そのちぐはぐ度が激しくて、医師の診断が必要な子もいれば、少しの配慮で足

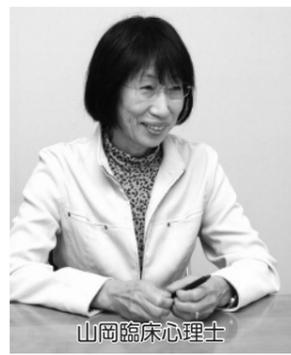
りる子もいます。

◆本人が一番苦しんでいる

「こんなことに困っている、ここを助けて欲しい」ということを、うまく伝えられない場合がしばしばあります。訳も分からず苦しんでいて、それに輪をかけて「なぜできないんだ」と責められたり、自分で自分を追い込んだりすることも。いきなりパニックになったり怒り出したりの子も、本人が気付かないうちに、常に気持ち張り詰めているからなんです。

◆余裕の持てる環境を、2重にも3重にも

生まれつきの特性なので、本人は気付きにくいもの。周りの人が余裕を持って見つめ、求めているものをくみ取ってあげる必要があります。そのためには、接する人にも余裕の持てる支えが必要。本人を取り巻く人たちが、2重にも



山岡臨床心理士

3重にも支えええれば、誰もが生活しやすい社会になりますよね。

◆子育ての神髄

発達障害の子どもたちは純粋で、刺激にも敏感です。でもそれは、程度の差はあれ、子どもたち全般に言えること。「頭ごなしに否定しない。その子の気持ちをくみ取ってあげる」など、発達障害の子への対応は、子育ての基本にそのまま当てはまります。だから、彼らに配慮することは、全員に配慮することになるんです。

◆できないことを数えるより、できることが増えるように

特別支援教育補助員

◆「困り感」に寄り添う

私たちは、配慮が必要な子がスムーズに学習できるよう、手助けをするのが役目です。先生がクラス全員に言っても、それが自分にも言われていると気付かなかつたり、ゆっくり言わないと伝わらなかつたりと、子どもにより困っている点はさまざま。この「困り感」を、自分



学習の手助けをする補助員

で解決できるようにサポートをしています。

◆障害の有無は関係ない

誰も、人に認めて欲しいという気持ちはあります。そして、どんな態度をとっていても、そこには理由があり、手を差し伸べることで、すぐに成果は出なくても、必ず本人のプラスになります。

相手に障害があるとうと無からうと、愛情を持って接していくことが大切。できないことを数えるより、一つでもできることが増えるようになれば、みんなが幸せな社会になりますよね。



全力で競技場を駆け抜けた鮎海さん。しかし、結果は2レースとも最下位でした。

肩を落として会場を出てきた鮎海さんを、笑顔で待っていたのは母親の千恵子さんでした。

「よくがんばったね、お疲れ様。」

残念でしたねと、千恵子さんに声を掛けると意外な言葉が返ってきました。

「ごほうびみたいです。自分の娘が全国大会の舞台に立っているなんて、夢みたいですよ。」

12月3日(月)〜9日(日)は障害者週間。この期間は、身近な人がくれたやさしさ、愛情、そんなごほうびを見つける時なのかもしれません。

市では、障害などにより、日常生活を送ることが困難な人をサポートしています。詳しくは、障害福祉課(☎712259)へ問い合わせください。